

聖きみに



聖きみに

聖きよき啓しめし示しを被こうむりて

三さん摩ま耶やの窓まどし開ひらくれば

清きよきみ天そらは朗ほがらかに

常とこよ世よのみ國くに現あらはれぬ

雲くもに聳そびゆる高たか樓どのは

金こが銀ねしろまに眞しん珠じゆ

るりほうせきしょうごん  
瑠璃寶石の莊嚴の

ななつたから  
七の寶の池見れば

こがねいざし  
金の沙はきらゝかに

たからうえき  
寶の樹に玉の枝

みそのあそに遊たのしぶ樂たのしみは

あまおとめ  
天つ乙女は雲くもをわ分け

てかが  
照り輝やくこときわ窮きわみなく

やつくどく  
八の功徳の水みずみてり

すおも  
清める面おもにぞ照てり徹とおる

こがねはな  
金の花は咲さきにほふ

むみやこ  
無爲の都みやこの春はるながし

かなたえ  
奏かなづるしらべたえ妙たえにして

ひゞける音おとの楽たのしさは

日々ひびに六度むたびの花はなの雨あめ

きしの山やま吹宛ふきさながらに

三昧さんまいの筵むしろに座ざを占しめて

烏瑟うしつの緑みどりは天そらにこい

金こがねの相好妙すがた たえにして

身みのおき處どこも覺おほほえじ

金こがねの庭にわにぞふりつもる

何いづれの色いろぞとまがふらめ

仰あおぎ奉まつれば彌陀尊みだそん

五山ごせんの毫光ごうこうかゝやける

月つきのみ顔かおは圓まどかなり

巍たかき威儀みいずは嚴おとそかに

菩薩ぼさつは妙たえなる法身のりのみに

如來によらいを繞めぐりし裝よそおひは

無爲むい泥洹ないおんの境さかいには

大悲だいひ心こころに薰くんじてぞ

萬よろずの德とくは滿みちみてり

おのく威德いとくそな備はりて

雲くもの月つきをかこむ如ごとと

長閑のどけと有無うむを離はなれにき

分身利物ぶんしんりもつの極きわなけむ

# 念佛七覺支

みおやの しんじき しこんにて  
 えんこう てつしょう したまえる  
 たんじょう むびのみすがたを  
 みなをとおして おもおえよ

ねんぶつしちかくし  
**念佛七覺支**

(一) 擇法覺支  
 ちやくほうかくし

みおや しんじきしこん  
 彌陀の身色紫金にて

えんこうてつしょう  
 圓光徹照したまへる

たんじょうむび みすがた  
 端正無比の相好を

みなとお おも  
 聖名を通して念ほえよ

すべて みだるる ところ  
總の雜念乱想をば

神を遷うつして念ねんずれば

(二) 精進覺

支

聲々御名を稱となへては

身心彌陀を稱念しょうねんし

金剛石も磨みがきなば

三摩耶さまやに神を凝こらしなば

排ひらきて一向如來ひたすらみほとけに

便すなはち三昧成さんまいじょうずべし

慈悲じひの光ひかりを仰あおぐべし

勇猛ゆみょうに勵はげみ勉つとめかし

日光にっこう反映はんえいするが如ごとと

彌陀みおやの光ひかりは輝かがやかん

(三) 喜き 覺かく

偏ひとへに佛みおやを見みまほしく

身命しんめい惜おしまず念ねんずれば

念々ねんねん佛ほとけを念ねんじなげ

靈きよきめぐみに融とけあ合あうて

支し

愛慕あいぼの情なさけいと深ふかく

即すなわち彌陀みおやは現あらはれん

慈悲じひの光ひかりにもよほされ

歡喜よろこび極きわなく覺おほほゆれ

(四) 輕きよう 安あん 覺かく

支し

御名みなに精神こころはさそはれて

心念しんねんますく至微しびにいり

三昧さんまいじゆんじゆく純熟とまする時は

我等われらが業障ごつしようふかき身みも

身心しんじんあるを覺おぼほえで

(五) 定じよう 覺かく

彌陀みおやに心こころをうつせみの

三昧さまや正受のおくに入りぬれば

慈悲じひのみ顔かおを觀みまつれば

清朗ほがらかにして不思議ふしぎなり

慈悲じひの聖意みむねにとけあうて

定中じようちゆう安やすきを感かんずなれ

支し

もぬけ果はてたる聲こゑきよく

神氣融液こころはきよみ不思議ふしぎなり

盡すべての障礙さわりも除のぞこりぬ

入我我入の靈感に

聖き心によみがへる

(六) 捨 覺

支

絶対無限の光明の

中に安住するときは

此處に居ながら宛がらに

神は淨土に栖み遊ぶ

夜なく佛と共に寝ぬ

朝なくも共に起き

立居起臥添まして

須臾も離るゝことぞなき

(七) 念 覺

支

聖寵めぐみに染そみし我心わがこころ

聖旨みむねの光ひかりに靈化れいかせば

聖旨みむねを意こころとするときは

みな佛心ぶつしんとふさはしく

秋あきの梢こずえのたぐひかも

光榮さかえあらはす身みとぞなる

八億四千はちおくしせんの念ねん々ねんも

佛子ぶつしの徳とくはそなはるれ

三身さんしんの聖歌せいか

法ほつ身しんの讚さん

(一)

(七覺支の譜に同じ四〇頁)

仰あおぐも畏かしこき阿彌陀尊あみだそん

三身さんしん一如いちにの法のりの身みは

摩訶毘盧遮那まかびるしやなと號なづけては

一切よろずの本初はじめに在ましませり

六大むつの無礙むげなる靈體れいたいは

萬德まんとく法爾ほうにとそなはりて

遍あまぬく時じくう空くうに亘わたりては

永恆とわに自おのづと在ましませり

世々のあらゆる諸佛と

乃し生とし活く物の

されば一切の諸佛も

如來不思議の靈徳を

(一一)

毘盧は宇宙の王に在し

天地萬ろづの物をみな

天地よろづの神祇と

大御親にて最と尊し

有ゆる三世の聖等も

咸な悉く讚めまつる

一切萬法の則として

統攝ますなり畏こくも

一切すべて智慧ちえと能みわざとの

即すなわち因果いんがの律のりとして

あまつみ空そらに列つらなりし

地ちに生おいしげる草くさも木きも

朝日あさひま眩まばゆくかゝやくも

射いと通とおる星ほしのひかりをも

秩序すじめ正ただしく爲なしますも

世界このよの衆生すべてを生成うみなせり

數かぞへず星ほしのめぐれるも

天則みてに係かからぬ物ものぞなき

冴さやかに照てらす月つきの影かげ

法身きみの光榮さかえを現あらはせり

三界このよはすべて我が有ものぞ

即ち我子すなはわがことのたまへる

天地あめつちよろ萬づのものをもて

われら衆生すべてを恵めぐみます

明あけきひかりに新あたらしき

われらが命いのちを賜たまひます

我等われらは法身みおやに受うけにける

生いきとし活いける物ものはみな

佛ほとけは我等われらが父みおやなり

恚かくは至しだい大だいに設そなえ備えては

聖旨みむねの程ほどぞたふとけれ

糧かてと清きよけき澎えい気きもて

こオヤの恩みめぐみ寵ふかいと深ふかし

靈性れいせい本もと自より具そなふれば

攝化せつけのひかり被こうむりて

聖旨みむねに契かなふ子ことならん

報身ほうしんの讚さん

(聖きみくじの譜に同じ三六頁)

(一一)

本有ほんぬ法身ほつしん阿彌陀尊あみだそん

無明くらきに迷まよふ子こらがため

本覺ほんがく眞如しんによのみやこより

法藏ほうぞう菩薩ぼさつの迹あとを垂たれ

一子いつしの慈悲じひの割わりなくも

苦海くかいの衆生しゅじょうを救すくはんに

何成いかなる苦毒くどくを受うくるとも

忍しのんでつひに悔くいじとの

無量むりようの願行成就がんぎようじようじゆして

本迹不二ほんじやくふになる靈體れいたいを

無量光土むりようこうどにましまして

世界せかいを照てらして念佛ねんぶつの

衆生しゆじよう至心ししんに信樂しんぎようし

恩寵めぐみのひかりを蒙こうむりて

光ひかりに遇あは、罪つみも消きえ

即すなわち十劫ほとけ覺なと現たまり給たまふ

無礙むげ光王こうおうと名なづくなり

光明ひかりあま遍ひつぽうぬく十方じつぽうの

衆生しゆじようを攝取せつしゆしたまへり

佛ほとけの慈悲じひを念ねんずれば

便すなはち信心しんじんなりぬべし

歡喜かんぎきはなく覺おぼほえて

身心しんじんともに安やすらけく

信心しんじんまこと眞まことに得うる人ひとは

聖旨みむねに契かなふ子ことなれば

いよく命いのちの終おわりには

慈悲じひの面影おもかげ観みまつりて

(一一)

清きよき啓示しめしを被こうむりて

清きよきこゝろに蘇よみがへる

有う漏ろの依身えしんは變かわらねど

法子みこの天職つとめを務つとむなり

一切すべての障さわり盡つきはて、

聖きよき御みもとに到いたるなり

こゝろの智見まなこひら開ひらくれば

ほうぶつふしぎ さかいの境なる

くも 雲にそびゆる宮殿は たかどの

る りほうせき 瑠璃寶石の莊嚴の

たから いけ 寶の池には水澄みて

ななえ 七重のうゑきに網覆ひ あみおお

たから はちす 寶の蓮華は地に満ちて ちみ

ひかりに化佛現はれて けぶつあら

はなのみくに 花藏世界はあらはるれ

こがねしろがね まにしんじゆ 金銀 摩尼眞珠

て かがや 照り輝くこと極みなし きわ

こがね いさこ 金の沙は照り徹ほる と

はな このみ 花と果はかゝやけり

むりよう いろ 無量の色にひかりあり

みみよう のり 微妙の法を説きたまふ と

阿彌陀あみだ無量光王尊むりようこうおうそん

相好圓滿そうこうえんまんしたまひて

無數むすうの菩薩ぼさつは法のりの身みに

如來にょらいを繞めぐりし装よそおひは

世尊せそん大衆だいしゆのなかにして

清風宝樹せいふうほうじゆを吹ふきぬれば

あまつ乙女おとめは雲くもを分わけ

妙たえなる花はなをあめふらし

身色金山王しんじきこんせんおうの如ごとと

威神いじんのひかり極きわみなし

智慧ちえと功德くどくと備そなはりて

雲くもの月つきをかこむごと

妙法みのりを説ときて已おわるとき

百千ももちの楽がくを作なすがごと

天てんの伎楽ぎがくをならしては

佛ほとけと大衆だいしゆにちらすなり

# 應身の讃

シャなえんまんの  
あみだせん  
みたまをここに  
わかちては  
はっそうおうげの  
あとをたれ  
しゃかむにぶつと  
なづけます

The image shows a musical score for the song "讃の應身" (Praise of the Bodhisattva). It consists of eight staves of music, each with a line of Japanese lyrics underneath. The music is written in a single melodic line on a treble clef staff with a key signature of two flats (B-flat and E-flat) and a 4/4 time signature. The lyrics are: 1. シャなえんまんの, 2. あみだせん, 3. みたまをここに, 4. わかちては, 5. はっそうおうげの, 6. あとをたれ, 7. しゃかむにぶつと, 8. なづけます. The score ends with a double bar line on the eighth staff.

應身おうじんの讚さん

舍那圓滿しやなえんまんの阿彌陀尊あみだそん

八相應化はつそうおうげの迹あとを垂たれ

先まづ出いで初そめし雲居くもいなる

天地あめつちよろづの民草たみぐさに

地ここに出いでてはカピラエの

時ときを選えらみてたましひを

靈みたまを忍土ここにわかちては

釋迦牟尼佛しやかむにぶつと號なづけます

兜史陀としだの内うちの宮居みやいには

めぐみの露つゆを濕うるほしぬ

淨飯王ストダナラージャを父ちちとはし

摩耶マヤの母胎もたいに降くだします

うづき八日ようかの長閑のどけさに

降誕あれます聖子みこの産聲うぶごえは

一切よろずの善事よきこと遂とぐるてふ

圓まじかにそなふる相好みすがたは

學まなびの園生そのうにのぞみては

技藝ぎげいの林はやしにあそびては

四門よもの遊あそびに仇あだし世よの

ラビの園生そのうの花はなのもと

天あめと地つちとに響ひびきしと

悉達シタル太君ダギミとは名なけらる

梵仙ほんせん阿私陀アシダを感うごかし、

五明ごみょう四吠陀しべだの花はなをめ

奥義おうぎの室しつに入いるとかや

常つねなき相さまをさとりては

あめ みした しろし  
 天の下を統治めす

ひと みち いも せ  
 人の倫とて妹と背の

い むつ ねや と  
 最と睦まじき閨の門に

また みち え ほ  
 上なき道の得ま欲しく

けんちよくめおう め  
 乾陟馬王に御されては

みやま くも わ い  
 深山の雲を分け入りて

みづから みぐし のぞき  
 みづから鬚髪を除ては

また くらい さ  
 上なき位も避けたまひ

ちぎ そめ ヤスダラ  
 契り染ける耶喩陀羅と

みこ ラゴラ あげし  
 王子の羅喉羅を擧かど

きさらぎ ようか あかつき  
 きさらぎ八日の曉に

ひそかに みや いで  
 ひそかに宮を出ましぬ

たまの かざり  
 たまの飴をぬぎすてつ

のり ころも か  
 法の衣に替へたまふ

千里ちさとの霞かすみを踏ふみのぼり

解脫げだつの道みちを訊とひしかど

尼連禪河にれんぜんがのほとりなる

具つぶさに苦行くぎようを積つもりては

こがねの流ながれに浴ゆあみては

献ささぐる乳ちちを受うけまして

伽耶ガヤの毘鉢羅ヒバラの樹下このもとに

アラ、ウドラの仙人そまびとに

意こころを得えまさで立たち去さりぬ

緑みどりの草くさしくそのふにて

六度むたびの春はるを經へにけらし

サイナの女むすめナダバラが

頓とみに氣力ちからをよみがへし

金剛座かたきいわおのこけむしる

むすぶあなうら跣あなうら跌あなうらいかめしく

天あまつ魔羅まらが吹ふきおこす

青天あま牙みそらかに照てりわたる

臘しわす月よう八日かのあかつきに

無む明み生よう死しのゆめさめて

佛ぶつ陀だのをしへは正また覺まの

牟む尼にの法みのりは涅槃ねはんなる

三さ味まの床ゆかに曳ひきしめぬ

百もものいかづちむら雲くもも

月つきには障さわりあらざりし

明み星よう仄じかに出いでしとき

無また上な正き覺さを得えたまへり

無み量だの光ひかりをさとらしめ

無と量わ壽のみ國やこにかへるなり

世よを度すくふこと五十年いそとせに

應化おうげの迹あとは狗尸クシナ那ナなる

まことば久遠くおんじつじよう實成じつじようの

常恒とわに樂たのしき御國みくににて

願ねがはくは我わが同胞はらからよ

聖旨みむねに仕つかふ身みと爲なりて

三輪さんりんまどかの範のりを垂たれ

鶴つるの林はやしにかくれしも

無量壽佛あみだほとけにましませば

光明攝化こうみやうせつけのきはみなし

恩寵めぐみのひかりに更生よみがえり

安やすき御許みもとにいたらなん